

野洲駅～守山宿～草津宿を歩く

4月15日いつもの4人で先回の続き、野洲駅から草津宿まで約9kmを歩きました。朝方は雨も予想されましたがお天気は上々、今回は朝二番列車で出発です。そして、岐阜県御嵩宿をスタートして、当面の目標であった中山道の草津までを歩き通しました。草津～京都はすでに歩いており、中山道は御嵩～京都まで歩き終えたことになります。

大府から米原行きに乗る

東浦駅 6:23 の列車に乗り、大府で乗り換える列車は大垣行きではなく、珍しく米原行きである。米原まで直行する列車は少なく、しかも快速ではなく普通列車だ。普段名古屋に行くときなどは区間快速を利用するので、大高、笠寺、熱田と停車する列車に乗ることはない。そんな駅からも大勢の人たちが乗り込んでくる朝の通勤風景に、お目にかかることがなく新鮮な感じがした。名古屋を過ぎて、岐阜を過ぎてはかなり混雑しており、普通列車の存在価値はおおきなものがあるようだ。そして、大垣駅に停車するとさすがに多くの人が降りて、立っている人はいなくなった。

やっとローカル列車の雰囲気になり、たびたび訪れたことで見慣れた風景も、今回が最後であろうと辺りの景色を眺めていた。するとアナウンスがあり米原の乗り継ぎ案内が流れた。大阪方面へは快速と普通列車の案内があったが、予定では13分待ちで網干行き快速に乗る。ところが降りてみると同じホームの反対側に、快速列車が待っていて今や発車寸前だった。そこで、近江八幡で乗り換えればよいのでとっさに乗り込んだ。ドアが閉まり動き出すと、停車駅の案内放送が流れた。聞いていると「…近江八幡・野洲に停車します」と言うではないか、ラッキー!! でもパソコンで調べたダイヤでは次の電車なのだ。おそらく乗り換えに要する時間は3分、との条件が設定されているのだろう。同じプラットホームに止まっていれば1分で乗り換えができるのに。

近江富士の三上山と背比べ地蔵

9:21 野洲駅到着、駅前の大通りを400m程行くと新幹線の高架が見えてくる。その手



前を右折すると中山道である。大通りとは打って変わって落ち着いた静かな通りで、右側だけにグリーンの色が塗られている。この道を3分も行くと「外和木の標」(そとわきのしるべ)という説明板と街道のモニュメントがあった。それによると、ここから西 180m のところに朝鮮の外交使節を迎えた、朝鮮人街道の分岐点にあたりその歴史を伝える意味から設置されたという。と言

外和木の標にて

うことは、朝鮮の外交使節は中山道を通らなかったことになる。通さなかったのだろうか？ 確かにその少し先には、中山道・朝鮮人街道の分岐点の案内板があった。そのすぐ先には昔風の旅館があった、この街道にあって客が来るのだろうか。こんな所にあっても、ここにあることを知っている人でなければ予約もしないし....商売とは不思議なことばかりだ。

そんなことを思いながら行くと大きな交差点にぶつかり、左手に「背比べ地蔵」があった。説明は見当たらずよく分からないが、大通りからは近江富士の「三上山 432m」が見えるので、ひょっとしたらお地蔵さんが近江富士と背比べをしたのでは。でも違って、帰ってから調べてみるとこうだ。「この大小の石仏は鎌倉時代のもので、中山道を行きかう旅人の道中を守ったと伝えられています。また、当時は乳児がよく死んだので子を持つ親たちが、わが子もこのお地蔵さんくらいになれば、後はよく育つ、と背比べをさせるようになり、いつしか背比べ地蔵と呼ばれるようになりました」とあり、小さな地蔵が背比べ地蔵で、左手は阿弥陀如来立像と分かった。



右の小さなのが背比べ地蔵

そして、三上山は「[古事記](#)」「[延喜式](#)」にも記述があり、また[和歌](#)にも詠まれた由緒ある山です。[紫式部](#)が「打ち出でて 三上の山を 詠むれば 雪こそなけれ 富士のあけぼの」と詠んだように近江富士という愛称があり、[藤原秀郷](#)（俵藤太）による大ムカデ退治伝説が残ることから「ムカデ山」の異名も併せ持っていることで知られています。

「たでもち」と煉瓦造りの「造り酒屋」

背比べ地蔵から8分程行くとお菓子屋さんがあり、「たでもち」と書かれた旗が、いちご大福の旗とともにあった。いちご大福はよく分かるが、「たでもち」は聞いたことがなく、初めてお目にかかる。ショーウィンドを見るとチマキの隣に小さなお菓子があったがよく分からない。中に「蓼」が練りこんであるのか、あんこみたいに入っているのか？ いずれにしろ、蓼喰う虫も好き好きと言うくらいだから、一般的なお味ではないはず。と、そんな話をしながら行くとコミュニティーバスのバス停があり、「おのりやす」野洲市と書かれている、肝心のバスは一日3本しか走っていなかった。いずこのコミュニティーバスも事情は同じようなものらしい。



造り酒屋「宇野酒造店」



「たでもち」を売るお店

その先に「玉の春」の看板をつけた立派な和風2階建ての家が現れた。手前の門には「玉の春」「悠紀」と大きく書いた緑色の幕があり、奥の方には煙突も見える。思った通り造り酒屋で、道沿いに煉瓦造りの蔵や倉庫が並ぶ宇野酒造店と書かれていた。近江盆地のこの辺りは美味しい米も獲れるであろう、そんなところには必ず造り酒屋がある。私はお酒が得意ではないが、お酒の好きな人なら各地のお酒を味わってみたいと思うこ

とだろう。一方、煉瓦造りの建物に関心のある友が、この煉瓦造りはイギリス積みやフランス積みではなく、混合タイプみたいだと言う。

そんな会話をしながら行くと大きな交差点に出て、第一三共製菓の会社の前を通ると野洲川にぶつかる。

信号なし、横断歩道なし、歩道なし、どう歩けばよいのか!!

中学の社会で教わった天井川の代表、野洲川の名前は今も記憶にある。橋は片側だけに歩道のあるタイプだった、でも、その歩道に左右を分ける中央線はない。現実には自転車も歩道を走るのだ、ルールは違うかもしれないが現場を見れば誰でも自転車は歩道を通ることが安全と考えるだろう。日頃思うことに、こうしたルールと言うものはその場に最も望ましい形にすることだと考えます。ましてや道路などは様々な条件の違いがあり基本は基本として決めて、細部は実情に応じて自治体が決めることこそふさわしいと思います。何でもかんでも同じでなくてはいけない、という発想では進歩がない。つまり、ベストではなくベターを積み重ねることこそ大切だと固く信じています。

橋を渡り終わると変速(T 時路が少し距離をあけて右と左にある)の交差点で、左手からは車がでてきて右左折し、道路反対側のほんの少し先に T 交差点があり車がでてくる。信号はなく横断歩道もなく、そこを大型トレーラーやトラック、乗用車がひっきりなしに走っている。私たちはまっすぐ進むのだが、とても怖くて道路を渡れない状況だった。やっと道路を横断しても今度は歩道がないので、しばらくはびくびくしながら歩いた。車の運転手は、何でこんな所を歩くのだと思っていたのでは!! でも、ここが人の歩く中山道であることを忘れてはいけない。

交通安全の守り仏「帆柱観音」

10分程行くといくつかの案内板が目についた、その中で「吉身」の説明には「この辺りは吉水郷といわれ、豊かな森ときれいな水に恵まれ天下の景勝地だった」とある。江戸時代に守山が67番目の宿場に指定された時、「吉身」は西の「今宿」とともに守山宿の加宿として、その役割を果たした。そして、この地を流れる伊勢戸川は水がきれいで、源氏ホテル発生の川として親しまれてきた。現在は地元自治会が「川をいつもきれいに」する取り組みを始め「ホテルが住みよい吉身」のまちづくりをめざしている、と記されていた。

そのすぐ先に慈眼寺があり帆柱観音の説明がある。この寺は天台宗のお寺さんで檀家がない、古来、吉身や近隣の人たちから帆柱観音として親しまれ、広く信仰されてきたという。御本尊は十一面観世音菩薩立像で、最澄大師が桓武天皇の命で唐の国に留学、帰国の時突然の海難に遭遇した。その時海上に観世音菩薩があらわれて、風雨が静まり無事帰国された。帰国後大師は海難で折れた船の帆柱で、十一面観音菩薩と脇侍の持国天・多聞天像を彫り、中山道に沿う吉身の地に海難をはじめすべての交通安全の守り仏として安置したという。

その説明板のとなりには白壁の塀があって古い家並が続き、白と黒が美しい。そこに赤いポストと消火栓がアクセントになり、どこか懐かしい景色だ。かと思ったら、次は赤い花が満開に咲き誇っている、友のカミサンに聞くと「はなぞう」ではないかという。はなぞうなら我が家にもあったが、こんなに花ビラがたくさんついていたかな.....。

比叡山を守る「守山」

花を見て5分程行くと天満宮の前を通り、守山宿の本陣跡に着く。そこには「本陣跡推定地」の石柱と説明板があった。この場所は小宮山九衛門が務めた、本陣跡と推定されている。文久元年には皇女和宮が14代将軍徳川家茂にお嫁入りするさい、江戸へ向かう途中にこの本陣に宿泊されている。そしてこの場所は、昭和40年まで特定郵便局兼局長宅でしたが平成16年に取り壊されたという。



本陣跡推定地



守山宿の説明図

天保14年(1843)の中山道宿村大概帳によれば、守山宿は本陣2軒、脇本陣1軒、旅籠30軒、人口は1,700人だった。中山道は江戸板橋を第一宿として武蔵・上野・信濃・

美濃の各国を経て、守山は 67 番目の宿場。逆に京からは東下りの第一番目の宿として「京たち守山泊り」で旅人に知られた。ここ守山は江戸時代初期の 1642 年に「守山宿」として制札が与えられた。「守山」の地名は、比叡山延暦寺の東の関門として、東門院が創建されたことに由来する。すなわち、比叡山を守るという意味である。

そのすぐ先に守山宿ポケットパークがあって、歌川広重の絵や街道の説明などが掲示されており、ベンチも置かれていた。スタートして 1 時間少し歩いたので、ここで腰をおろして休憩した。掲示してある宿場の説明絵図には 1677 年に作成したことが記され、当時はまだ本陣・脇本陣は置かれていなかった。近江の中山道宿場は東海道の草津から分かれて、美濃の国境まで守山・武佐・愛知川・高宮・鳥居元・番場・醒ヶ井・栢原の 8 宿がありました。前にもふれたように、京を出て最初の宿泊地としていた。また、守山宿の中央に位置していた天満宮には、三十六歌仙絵が保存されている.....ことなどが記されていた。

茶店、公議御普請橋、常夜灯が歴史を語る

歩き出して 4 分程で街道は左に曲がって行く、そこは追分で石造道標が立っている。説明ではここは高札場跡で、道標には「右中山道 美濃路」「左錦織寺四十五丁」とある。右は美濃へ行く中山道、左は人々の信仰を集めた真宗本部派本山錦織寺へ続く道を示している。その先に半分ムシコ窓で格子窓の家があり、門前茶屋「かたたや」と書かれた説明板が掲げられている。守山宿東門院の門前に「堅田屋」という一軒の茶屋があり、旅籠も兼ねていた。



追分に立つ道標



門前茶屋「かたたや」

その同じ場所に、同じ建物で「門前茶屋かたたや」がオープンした、と書かれている。

次に小さな橋を渡ると説明板が、そこには今宿と守山宿の間を流れる境川に「公議御普請橋 土橋」が架けられたとある。中山道の重要な橋として、瀬田の唐橋の吉材を使って架け替えられたものという。当時の橋は長さ20間(36m)ありましたが、今は48mのコンクリート橋になっていると書かれている。が、渡った橋は5mもないくらい4.8mのことかな。

さらに同じ説明板に書かれていたのは「伊勢屋佐七の常夜灯」で、今宿村の商人伊勢屋佐七が浄財を集めて、土橋の橋詰に常夜灯を建立した。その後倒れたので明治の初めに樹下神社参道に移築されたという。目と鼻の先右手に樹下神社の石柱が立ち、両側に石灯籠が立ち並ぶ立派な参道の奥に鳥居があり、その奥は大きな木が茂る森になっていた。参道の正面からは見えなかったが、少し行くと鳥居の後ろに見慣れない形で、ちょんぼり高い常夜灯があり「太神宮」の文字があった。ということは、お伊勢さんへの案内と言うことになる。

滋賀県唯一の「今宿一里塚」

樹下神社から8分も行くと左手に立派な一里塚が現れる。住宅街の一角に立派に整備されていた。「今宿一里塚」で、滋賀県内に残る唯一のものと言う。一里塚は江戸幕府により慶長9年(1604)に整備された、中山道では江戸日本橋～滋賀県草津宿までに129か所あり、128番目がここ今宿一里塚である。

五間四方の塚を築き榎や松を植えて通行の目安とした。今も榎が大きく枝を



今宿一里塚



ホテルの住む川

広げているが、これは先代の榎が昭和の中頃に枯れて、その脇芽が成長したものと説明されていた。住宅街の一角にあることで、街のオアシス的存在であるばかりか、美しい街の大きな要素になっていると感じた。

その先 JA の前を歩いてしばらく行くと、道沿いに水路が流れている。看板があり「この水路にホテルがいます川をきれいにしましょう」とある。生活の身近に水の流れのあることは、潤いと安らぎを与えてくれる。そんなことを思いながら10分も行くと、大きな木に囲まれた大宝公園があり、芭蕉の句碑があると言うので立ち寄り小休憩。でも句碑の文字はぼろぼろで読めなかった。その近くに説明板があり、「縵のいわれ」として地名の由来がびっしりと書かれていた。この辺りは「へそ」と呼ばれる地名で、何かたくさん書いてあるが記憶に残らなかった。

立派に復元された「道路元標」

公園を出ようと歩き出すと、隣に立派な鳥居があり大宝神社の石柱があった。参道は奥の方に続いており社は見えなかった、が、道沿いに一本の石柱と説明板がある。見てみると、「大宝村大字縵元標について」と書かれている。まぎれもなく道路元標で、正面には大津市まで、草津警察署までの距離が示されている。右側面には第16師団司令部と大津第九連隊までの距離が示され、左側面には大宝村の各字までの距離が示されている。そして、裏面には大正6年2月15日建設・寄付西田哲太郎とある。さらに、本物は交通事故などで破損したため復元したことが説明されている。



道路元標(中央左の柱)



いよいよ草津に入る

そこから3分も行くと「草津」の標識が現れ、さらに10分も歩くと八幡社がある。その先5分ほどで東海道線が見えてきた、少し先で東海道線を横切るが、そうすれば草津宿までは2km未満の距離だ。ちょっと勇気づけられて歩いて行くと、鉄道をまたぐ陸橋がみえてくる。あの橋を渡るのかなと思っていると、地図を見ながら友が陸橋ではなく手前に地下道があるはずという。言われて見ていると、人や自転車が行き来するのが見えるので、通路があるようだ。近づくると確かに立派な地下道が整備されていた、東海道線と草津線の下を通りぬけて行く。

444年引き継がれた草津名物「うばがもち」

草津の街に入り、白壁に囲まれた大きな家の前を過ぎると「伊砂砂(いささ)神社」がある。説明板には本殿が重要文化財で一間社流造檜皮葺とあり、本殿の社は一間だから1.8mの小さな社で、流れ造りの屋根が檜皮葺というもの。ちょっとのぞいたが、舞台が手前にありよく見えなかった。この建物は棟札があり応仁2年(1468)に建立され、元禄4年(1691)に修理したという。

伊砂砂神社から10分程行くと商店街のアーケードがあり「きたなか」と書かれている。確か草津宿に来た時に、中山道との分岐点で旧草津川の隧道の先をのぞいたら商店街だった記憶がある。ひょっとしたら到着したかな?と思いつつながらアーケードを行くと、思った通り隧道のトンネルが見えてきた。



旧草津川の下を通る隧道



隧道を抜けると東海道との分岐

隧道の中はひんやりして気持ち良かった、かなりの長さで100mほどもある。

隧道をでると見覚えのある灯籠が迎えてくれた。12:32 到着した、これで岐阜県御嵩宿から、美濃、近江を歩き草津宿まで歩き通すことができた。



宿場まつりのポスター



うばがもち

先ほどの商店街に戻り昼飯にした、私は天井とミニうどん家内は天ぷらそばを食べた。おなかも満たして草津駅へ向かう、途中でコーヒータイムにしようとしたのだが、名古屋圏のように喫茶店はない。やむを得ず駅前のロッテリアでコーヒーを飲んだが旨くなかった。店を出るとお菓子処「うばがもちや」があった、先回来た時は買えなかった名物の「うばがもち」を買い求めた。このうばがもちは小さくておっぱいの形をしています。永禄12年、今から444年前織田信長に滅ぼされた近江源氏佐々木義賢は臨終の際に、三歳のひ孫を乳母に託します。乳母は郷里の草津に身を潜め幼児を養うため餅を作って売りました。そのことを周囲の人たちも知り乳母の誠実さを感じて、だれ言うとなく「姥が餅」と言いはやしたと言います。

草津は東海道と中山道の分岐点だったことから、旅人の格好の休みどころだったので「瀬田へ回るか矢橋へ下るか、ここが思案のうばがもち」と天下に知られるところとなりました。と、こんな説明がついていたが肝心のお味は、伊勢の赤福餅とよく似ていた。